

平成三年十月二十七日（日）

郷土研究会資料

第一八六回 史跡めぐり資料

東海道・品川宿を訪ねて（其の一）

第一八六回 史跡めぐり 資料

主催 越谷市郷土研究会

とき 平成三年十月二十七日(日)

集合 越谷駅東口前 午前八時三〇分

行先 東海道・品川宿を訪ねて (其の一)

コース 越谷駅―浅草駅―品川駅―北品川駅

問答河岸跡―相模楼跡―善福寺―利田神社―

鯨塚)―台場小学校―品川宿本陣跡(聖蹟公園)

…… 昼食 ……

品川神社(富士塚・板垣退助の墓他)―東海寺

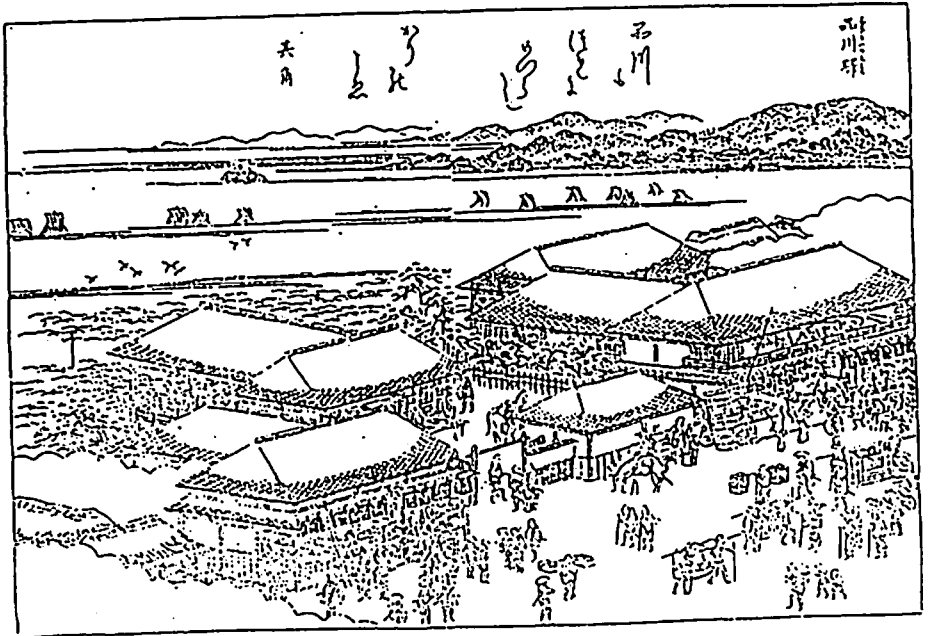
―東海寺墓地(沢庵の墓・加茂真淵の墓・井上

勝の墓他)―

新馬場駅―品川駅―浅草駅―越谷駅 ……解散

案内者 理事 山田 政信

参加費 金二二〇〇円(含む交通費、資料、保険料他)



新版「江戸名所図会」より

〔品川宿〕

江戸四宿の一である品川宿は、目黒川の河口付近に古くから、湊町として発展してきたものと思われる。

「江戸名所図会」には、「江府の喉口にして、東海道五十三駅の首なり。日本橋より二里。南北と分つ。東海寺の南に傍て貴船の側を流るる川を堺とす。或人云く、是即品川と称する所の水流なりと云々。旅舎数百軒端を連ね、常に賑はしく、往來の旅客絡駅として絶えず。」と、

「按に、品川の地名の発る所近きにあらず、東鑑、承久記等の書に、品川太郎・同次郎・同三郎・同四郎……などいへるあり、又鎌倉大草紙にも、品川左京亮、同下総守の名をあげたり。小田原の北条家所領役帳に、葛西様御領という中に、品川南北とあり……」

品川という名の由来は、川の名前からとする説と、品川氏という豪族がいたからという二説を紹介している。

東海道は、参勤交代の大名が一四六藩と多いことや、東海寺、川崎大師の参詣、海邊寺の紅葉狩等有名な社寺詣や、江の島や大山詣りの道筋にもあたるので、遊ぶ口実には事かかない。そのため、品川宿を通る人の旅宿よりも、遊興目あての遊廓が早くからできていて、北の吉原に対して、南の品川といわれ、江戸町民の歡樂の場所でもあった。

「問答河岸の碑」

伝るところによると、寛永の頃、三代将軍家光東海寺に参詣の折、品川の海をみて、家光いわく「海近くして如何が是れ東（遠）海寺」と問うに、沢庵は答えていわく「大軍を指揮して将（小）軍というがごとし」と、問答のあったところという。

「土蔵相模跡」

北品川きっての大旅館「土蔵相模」の跡で、最近とりこわされましたが、なまめかしい朱塗りの窓枠や、庭には船から宿に入れるよう造った船着場のもとなどがのこっていた。

幕末の文久二年（一八六二）にこの土蔵相模に長州藩士、高杉、久坂、伊藤、井上達がよりあつまり、ひそかに用意をととのえ、御殿山に建設中の外国公使館を襲撃、イギリス公使館に放火をした。

これは、長州の過激攘夷派の人々が、江戸町民の花見の名所として知られている御殿山に幕府が公使館を建たのに我慢できずに、幕府の森をあかしてやろうとしたことである。

現在、当時の「土蔵相模」の模型を作り、品川区立品川歴史館に展示されている。

〔善福寺〕

永仁二年（一二九四）の開創であるという。本堂正面入口の上から壁面にかけて、漆喰殺絵の鹿が描かれている。江戸末期の左官、伊豆の長八の作といわれている。惜しいことに現在は剥落が甚しく、補修されて一部のみ残っている。

作者の入江長八は文化十二年（一八一五）伊豆の松崎村に生まれ、十二才で左官、関仁助に弟子入りし、その後、江戸に出て、狩野派の絵を学び、以後絵の画法と左官の技を合せた漆喰殺絵という独特の分野を開拓した人である。現在、静岡県賀茂郡松崎町に昭和五十九年に完成した長八美術館があり、作品を収蔵している。

カガツ
〔利田神社〕

（鯨塚）

利田神社は寛永三年（一六二五）沢庵禪師が海上安全の神として、弁天社を建てたのがおこりと伝えられる。

敷地内には、寛政一〇年（一七九八）に建てられた鯨塚がある。梅翁隨筆（作者不詳）によると、この年の五月、暴風雨に追われて、鯨が品川沖に迷い込んだ。人々は大騒ぎとなり、天王洲に追い上げ、しとめた。それが江戸中の評判となり、見物人が殺到した。将軍（十一代家齊）も芝の御浜御殿（新橋の浜離宮の庭園）にこれを曳かせて見物した。後に骨の一部を埋めて、塚を築いたのが、鯨塚である。当時、日本の近海にも、いかに鯨が多かったかを知ることができる。

〔台場小学校〕

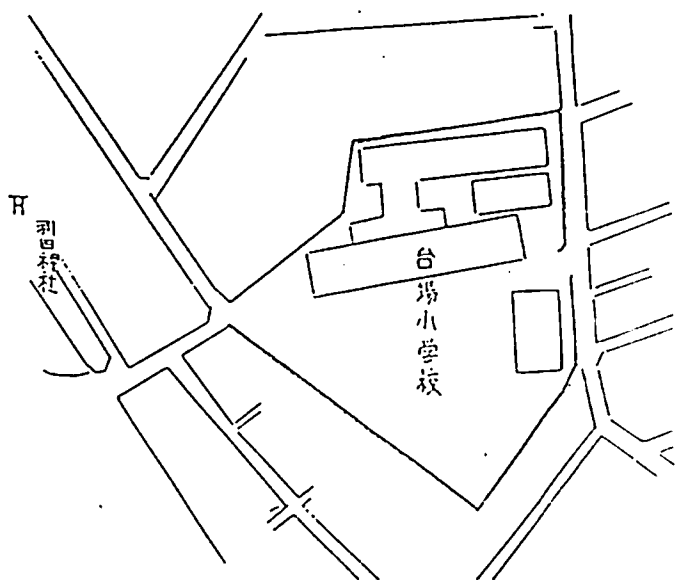
嘉永六年（一八五三）ペリー来国に伴い、品川沖に十一の台場（砲台）を造ることになり、設計は洋学者武田甲斐三郎（伊豆の代官江川太郎左衛門に師事）であった。築造の台場のうち、唯一の陸続きで、御殿山台場とよんだ。

台場の五角形が、そのまま敷地となっておるため、現在、敷地の廻りが曲りくねっているのである。（略図参照）

校庭には、台場の石垣を用いて「ミニ台場」がつくられ、小さな灯台がのっている。

〔品川宿本陣跡〕（聖蹟公園跡）

この公園が、品川宿本陣のあった跡で、南・北品川宿、歩行新宿のいわゆる品川三宿のここが丁度真中に当たるとある。しかし、往時をしのぶ何物も残っていない。



明治元年（一八六六）一〇月一二日、二三〇〇人の大行列をひきいた明治天皇は、ここにあった品川本陣に宿したのである。当時薩摩屋敷焼打ちにまきこまれ、宿場の一部も焼かれたあとだったから、これだけの人数を泊めるのは大騒ぎとなったことであろう。

品川三宿のうち、一番にぎわいを見せていたのが歩行新宿で、遊興費でも格差があったようである。天保初年（一八四三）当時で、歩行新宿三一軒、北本宿二〇軒、南本宿三八軒他合せて九四軒の旅籠があったという。

〔品川神社〕

この神社の歴史は古く、文治三年（一一八七）、源頼朝が安房国洲崎明神を勧請し、海上安全を祈願したものと伝えられている。元応元年（一三一九）二階堂道蒞が、宇賀之売命を勧請し社殿を再建する。また、文明十年（一四七八）太田道灌が祇園社（牛王天王）を勧請（「江戸名所図会」によると永享年中（一四二九―四〇）太田道真（太田道灌の父資清）が勧請するとある。）して相殿としたと伝える。品川神社は江戸時代は北品川稲荷社とよばれ、相殿に祇園、貴布禰の両社を祀った三社の合殿であった。祇園社は牛王天王を祀るところから天王祭とよばれ、南品川の荏原神社の祭礼も天王祭とよばれるので、区別して品川神社の祭礼は北の天王祭とよばれ、荏原神社の祭礼を南の天王祭とよんでいる。

境内には、文化財も多く、参道の石造の明神鳥居は、慶安元年（一六四八）の造立で、下総国佐倉城主堀田正盛が東海寺造営の工事完成を記念して寄進されたものである。都内では、上野東照宮につぐ古いものである。社務所前の水盤も、このとき同時に堀田正盛によって寄進されたものである。又、参道の両側には一対の陶製の狛犬がある。これは備前焼で、品川新宿の吉野屋が寄進したものである。

浅間神社前の石造灯籠は、鳥居と同じく慶安元年に造られたもので、工芸家後藤八兵衛（光利）と石工亀岡久兵衛（政重）の寄進である。都内現存の石灯籠としては初期のもので、品川区の文化財になっている。

◆ 富士塚

江戸時代に発達した富士山信仰の講（富士講）が、遙拝場所として、あるいは実際の登山に代る山として築いたもので、ここ品川神社の富士塚は北品川宿の丸嘉講中三百人によって、明治二年に築いたもので、今も富士のお山開きにあわせて登拝行事がおこなわれ、区の無形文化財となっている。

◆ 板垣退助の墓

ここは品川神社の境内ではなく、東海寺の塔頭高源院の旧基地である。寺は世田谷烏山に移転し、この基地だけが残された。碑面に「邦光院殿賢徳道円大居士」とあり、碑蔭に「従一位勲一等伯板垣退助之墓」とある。

天保八年（一八三七）〜大正八年（一九一九）。土佐の人・幕末時代には志士として活躍・明治新政府ができるやいなや参議となるが、征韓論で敗れ下野する。明治七年、民選議院設立の建白書を提出、自由民権思想の鼓吹につとめた。同十四年、自由党を結成し総裁となる。

同十五年、岐阜で暴徒に刺されたとき、「板垣死すとも自由は死せず」と叫んだというエピソードは有名である。しかし、この時死んだのではなく、板垣が政治家として陽の当たる場所へ出るのはこの事件の後である。

〔東海寺〕

「江戸名所図会」によると、「寛永十五年戊寅（一六三八）、徳川家光の命を奉じて沢庵和尚開創するところの禪園なり。（塔頭十七宇あり）とあり。また

「この寺は品川の勝区にして、門前の緑水は潺湲として品川の流、海口に通ず。屋後は青山雀窠として祇植の祠松間に聳ゆ。茂林脩竹、風帆沙鳥の勝覧、筆の及ぶところにあらず。殊更方丈の林泉は小堀遠州侯の指図にして、庭作の規範とす。……常に寂々寥寥として突に禅心をすましむるの一巨藍たり」とある。

◆ 沢庵和尚墓

沢庵和尚の墓はただの丸い石で、文字一つ刻まれていない。珍らしい墓である。簡雅というか、禅味というか不思議な墓である。この廟地の様は小堀遠州侯の指図なりという。

その人となりは、天正元年（一五七三）ノ正保二年（一六四五）。但馬の人。名は宗^{シノブ}彰。十歳で出家し、やがて大徳寺の一疎和尚について参禅修行、慶長十四年（一六〇九）大徳寺の住職となるが、わずか三日で退いた。その後は界や但馬などで、一衣鉢の生活に徹した。寛永六年（一六二九）に、寺院の統制強化をはかった事に対し、幕府に抗議をしたために、出羽の上山に流されたが、二代秀忠の死去による恩赦で許される。後江戸に下って三代家光の信任を得て、幕府創建の東海寺の開山となった。

◆ 賀茂真淵基

墓碑は沢庵和尚と同じく丸い自然石である。文字は一字も刻まれていない。国指定の史跡である。

遠江（浜松市）の人。加茂神社の神官の三男として生まれる。三十二才京都に上り荷田春満に師事し、本格的に国学研究を志す。四十才の時、江戸に出、芝崎好高（神田明神の神官）に身を寄せ、「源氏物語」「万葉集」の講読を始めた。延享三年（一七四六、五十才）、田安宗武の知遇を得、「和学御用」を勤め、引退するまでの十五年間にわたった。後に「県居」と称し、自適の生活を送った。

◆ 井上勝基

碑面に「正二位勲一等子爵井上勝」とある。鉄道記念物である。

長門萩の人。伊藤博文らとイギリスへ密航、鉄道、鉱山、造幣などの技術を学ぶ。滞英五年に及んだ。帰国後、鉄道頭となり、新橋、横浜間の鉄道敷設に尽力した。特に明治十三年の京都、大津間鉄道敷設にあたっては、技師長となり、初めて日本人だけでトンネル工事を完成させた功績は大きい。

参 考 文 献

- | | |
|--------------|---------|
| 新版 江戸名所図会（上） | 角 川 出 版 |
| 品川区史跡散歩 | 学 生 社 |
| 東京歴史マップ | 新 草 出 版 |
| 東海道を歩く | 東京新聞出版局 |

越谷市郷土研究会紹介

昭和40年(1965)3月に発足して以来、地道な活動ながら
息長く越谷の文化の向上に尽くし、今日に至る。

1. 役員紹介

会長(小島 誠) 副会長(石塚吉男・山田政信)
常任顧問(木村信次) 顧問(竹内 誠・大村 進)
理事18名(省略) 幹事長(谷岡隆夫) 幹事(宮川 進)
監事(上郷千春 吉田敏子)

2. 活動内容

※下記のア・イについては「広報こしがや」に前もって掲載
され、一般市民対象に参加希望を募る。

ア. 研究発表会

年間3回(6・8・1月)、第4日曜日の午後。
第1回の研究会発表会は、昭和40年4月24日、
大野伊右衛門会長(当時)の「方言について」である。

イ. 史跡めぐり

研究発表会と市民文化祭のある月(6・8・11・1)を除く年間8回
(4・5・7・9・10・12・2・3月)、第4日曜日。
越谷駅または南越谷駅にて集合・解散。

第1回は昭和41年2月27日の「大相模の不動尊」でした。

ウ. 会報『古志賀谷』の発行

創刊号(復刻版有り)は昭和47年3月31日発行、B5版53頁。
前回は昭和63年8月、第6号刊行。来年度第7号刊行予定。

エ. 市民まつり参加

オ. 市民文化祭参加

カ. 古文書クラブの活動

毎月第1・第3土曜日 北越谷公民館

ク. その他

昨年度(平成2年度)は「けやき学校歴史散歩教室」
全13回講師派遣(老人福祉センターけやき荘)
来年度、南越谷公民館に講師派遣予定(全3回)